

## 白河街区跡の調査

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 2005年3月から7月にかけて、京都市左京区岡崎天王町地内で発掘調査を実施しました。当地は院政期（平安時代後期）に造営された白河街区の一部に該当します。白河街区とは、白河殿や六勝寺を中心として開発された鴨川より東の街並みのことです。

六勝寺と白河街区 平安京の二条大路を東に延長した「二条大路末」と六勝寺の筆頭寺院である法勝寺を基準として、平安京にならった条坊が造営されたと考えられています。法勝寺西道から鴨川までは8町の規模であるのは分かっていますが、東・南・北側の区画の範囲が何町に及んでいたのかは明らかではありません。

法勝寺は、白河天皇の御願寺として、現在の京都市動物園付近に造営された4町から6町の規模を持つと考えられている寺院です。承保二年（1075）に造営が始まり、承暦元年（1077）には金堂・五大堂・阿弥陀堂・法華堂などの法要が行なわれ、永保三年（1083）には九重塔・薬師堂・八角堂が完成しています。12世紀中葉までに他の御願寺をはじめとする寺院や御所が、天皇や皇后などによって造立される中で、白河街区は街並みを整えていきます。

しかし、応仁元年（1467）に始まる応仁の乱によって多くの寺院

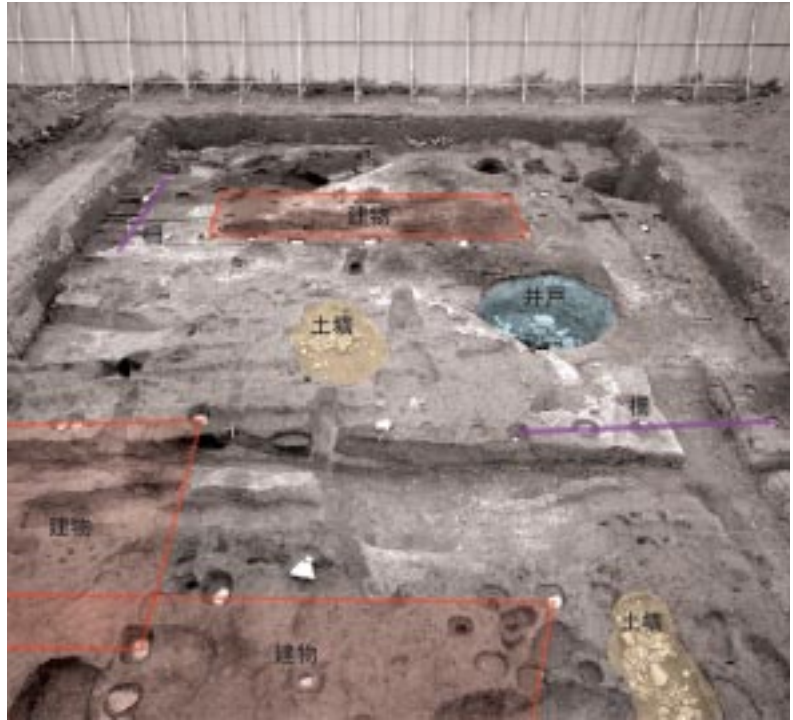


写真1 応仁の乱後の屋敷地遺構（北から）



調査地と白河街区の復元条坊

『六勝寺と白河御所』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991.11 を参照に作成



写真2 院政期の井戸（北から）



写真3 白河街区を区画する溝（南から）

や宅地が焼失・荒廃し、六勝寺の中で最後まで残った法勝寺も16世紀前半に廃絶しました。その後の白河街区は、畑地や水田として利用されたため、道路や宅地の痕跡をほとんど残していません。

院政期の遺構 検出した遺構には、井戸、土壇、町並みを区画する溝、柱穴があります。柱穴はまばらで、建物の配置や規模などを明らかにすることはできませんでした。

土壇は、深さが約80cmで、底に直径5～20cmの礫が敷き詰められ、完形に近い土師器皿が数枚入っていました。祭祀遺構の可能性がります。

井戸は4基検出し、いずれも方形に組んだ横棧を数段組み上げ、横棧の外側に立てた縦板が内側に倒れ込まないように造られたものです。一番残りの良かったものは、木枠の内法が1辺1.2m、深さ約2.3mで、底に大小の曲物を2段積みにしていました（写真2）。

検出した町並みを区画する溝は、南北方向の小路東側の道路側溝

（外溝）と宅地内の溝（内溝）に相当します。また、この道路の中心は法勝寺金堂の中軸線延長上に位置しています（写真3）。

出土遺物には、法勝寺などで出土する土製円塔や同文様の軒瓦などがあります。

応仁の乱後の遺構 検出した遺構には、根石をもつ掘立柱建物と柵、井戸、土壇、町並みを区画する溝などがあります（写真1）。

建物は、6棟検出されています。いずれも、柱穴の底部に根石を据え、その上に柱をのせた掘立柱建物です。柱間は約2mが基本尺となっています。

井戸は、円形の石組みの底部で曲物や方形の板棧を据えたものが主で、特異なものに上部が石組み、下部が縦板横棧組みの方形井戸があります。円形の石組み井戸から、土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入青磁、瓦、木製品（箸・折敷・焼印のある曲物・下駄・人形・漆器椀・木炭など）、種実、動物遺体（魚の鱗・昆虫など）が出土しています。

完形品を含む大量の土師器皿を投棄した、ゴミ捨て穴と思われる土壇を3基検出しています。

宅地の西端で溝を2条検出しました。東側は宅地内の溝ですが、西側の溝は布掘りで底に根石が並べられていることから、築地に相当する可能性があります。

まとめ 今回の調査によって、院政期の町並みを区画する溝・井戸・土壇などを検出し、今まであまり知られていなかった白河街区跡の一端を明らかにすることができました。

また、当地は応仁の乱後は荒廃して人は住まなくなったと考えられていましたが、平安時代の区画溝を踏襲した溝が確認でき、根石をもつ建物、井戸とごみ捨て穴などをセットで検出したことから、室町時代後期（15世紀後半）の宅地として継続的に利用されていたことが分かりました。

応仁の乱の混乱期を乗り越えて、生活する当時の人々の姿が眼前にうかんでくるようです。

（近藤 奈央・木下 保明）